

J. Forsyth. A Grammar of Aspect. Usage and Meaning in the Russian Verb (Studies in the Modern Russian Language, extra volume). Cambridge, 1970. 386 p.

田 中 継 根

従来、体をめぐる理論的側面については数多くの研究がなされてきた^[1]が、体の実際の用法については非常に狭い範囲の研究が殆んどであって、用法を多少とも体系的に述べたものはごく僅かである。^[2]それらにしても、後述の O. П. Рассудова のものは別として、多くは体の個々の具体的、特殊的用法を羅列したものか、あるいは不十分な一般理論で無理に押し通そうとするものか、あるいはまた体の選択に際しての主観的要因を過大評価したものであって、読者は理解が深まるどころか逆に混乱してしまうことが多いのではないだろうか。

この Forsyth の著書は、それらとは違って、体の用法、意味についての確かな理論を築き、それをもとに体の様々の用法を解明しようとするものである。その理論の背景となっているのは、R. Jakobson の次の有名なテーゼである。Jakobson は「二つの相対立する形態論的カテゴリー」に関して次のように述べている。「もしカテゴリー 1 が意味 A の存在を表わすならば、カテゴリー 2 は意味 A の存在を表わさない。すなわちそれは A が存在するかどうかを表示しない。カテゴリー 1 との比較におけるカテゴリー 2 の一般的意味は、A-指示の欠如に限られる」^[3] Forsyth はこの「欠如的対立」^[4]を体の問題に適用したのであって、カテゴリー 1, 2 がそれぞれ完了体、不完了体に相当する。彼による完了体の定義は次のとおりである。「完了体動詞は、行為を、特定の一つづきのものに関して要約された全一的できごととして表現する」^[5] (p. 8) これに対して不完了体にはそのようなポジティブな意味はなく、単に完了体の持つ一般的意味を内在的に表わさないだけであるとされる。従来しばしば不完了体の重要な意味であるとされてきた動作の過程、反復などは、この考えによれば不完了体の内在の意味などではなく、それらはコンテキストによって（例えば долго, часто 等の副詞の使用）現れるにすぎない (p. 4)。不完了体は、完了

体に内在的な、行為への特定の見方を避けるためにこそ用いられるのである (p. 11)。

Forsyth によれば、完了体には意味の三つの要素がある。すなわち、① 語彙的意味 (lexical meaning), ② 文法的意味：時制, 法等 (grammatical meaning: tense, mood etc.), ③ 文法的意味：体 (grammatical meaning: aspect)。これに対し不完了体には③の要素が欠けており、従って不完了体はある意味で non-aspectual と言える (p. 14)。不完了体の本質的機能は「行為の名指し」(naming of the actionあるいは simple denotation) であって (p. 15), この行為の名指しは一般には不完了体の事実伝達機能と呼ばれるものであり、それが不完了体の持つ幾つかの意味の一つと見なされてきたのであるが、著者によれば、それこそが不完了体の持つ唯一のポジティブな意味なのである。

行為の名指しは、具体的には表面上相反する二つの方向を取る。一つは行為そのものの確認または強調、すなわち単にその行為があったのかなかったのか、あるいは未来においてあるのかないのか等である。例えばレストランで給仕が—Вы уже заказывали?—と質問する。あるいは—Почему здесь так пыльно? Ты убирал сегодня комнату?—といった用法である (p. 82—83)。もう一つは文の他の要素 (行為者, 行為の対象, 時間・場所, 目的・理由等) の強調である。例えば—Кто сегодня убирал комнату? Почему так много пыли?—では行為者が問題にされ—Зачем я это приглашал его?—では行為の目的が問題にされている (p. 84—87)。これに反して完了体は一般に文のすべての要素を同じ程度に強調するのであって、この点で上記の二つの方向は一致すると考えてよい。これは結局文中での意味のウェイトの配分の問題であり、Forsyth はこのような logical weight の配分を、文の syntactic-expressional balance (統語論的・表現的バランス) と呼び、文中の既知の要素、未知の要素 (新しい話題) の問題、他動詞の transitivity, アクセントの置き方、イントネーションといった様々の要因とかがかわらせて詳細に検討している。例えば—Позвонил из обкома. Вызвал Бликин.—では、電話があったのだから「呼び出す」という行為は既知の行為であり、ここで問題にされているのは誰が行為者なのかということである。それに対し、

Сафонов. Это верно. А писателя вызвал?

Ильин. Вызвал.

Сафонов. Я его хочу начальником особого отдела.

という会話では、「呼び出す」という行為は新しい話題として持ちだされており、意味のウェイトは行為自体にも行為の対象にも等しくかかっている (p. 82—92)。

初学者にとって体の用法が最も奇怪に見えるのがおそらくこの領域であり、単なる事実の伝達などというあいまいな説明では解明されなかった不完了体の用法が十分に納得のいくものとなるはずである。ここでは両方の体の使用は実際の意味の分化をもたらさないとはいえ、しかし全く同一の文ではあり得ないのであって、上に述べた文のバランスを考慮に入れて初めてその相違が明らかになるものと思われる。Forsyth は不完了体の持つ naming of the action の機能を、すべての文法形式（過去形、現在—未来形、命令法、不定法）について、豊富な用例をあげて説明しており、その機能の重視が本書の主要なねらいの一つであることは明らかである。

また本書では、反復行為を表現する体の用法に特別の章が当てられており (p. 153—193)、そこでは不完了体による一般的方法の他に、完了体による一括化 (summarization)、例示 (singularisation) の方法が文体論的説明も加えて詳細に論じられている。

Forsyth の依拠するのは「欠如的対立」による体の一般的理論であるが、彼はその理論のみですべてを割りきろうとするのでは無論ない。体の選択を決定する要因として先ず第一にその基本的意味があるのは当然であるが、実際の発話において大きな影響力を持つものとしては、上述の文の syntactic-expressional balance の他に、それぞれの文法形式の特殊性や、動詞の語彙的意味の特殊性がある。体の一般的意味はこれらの要因に大きく制約されることがあり、ある要因はどちらかの体の意味の出現を容易にし、また他の要因はその逆であるといったような事態が非常にしばしば現れる。問題は大変デリケートであり、決して明解に割りきってしまうものではないのだが、著者は体の基本的意味と上記の様々な要因との相互関係に十分な考慮を払いつつ、可能な限りの明解な、しかし決して強引ではない結論を導き出そうとしているように思われる。著者は不定形の体の用法では、不定形と結びつく動詞や無人称述語の意味（意志、能力、許可、不可能、禁止、警告等）によって用法を細かく区別しているが、ここでも態度は慎重であって、上記のいろいろな意味を（しばしばなされるように）特定の体にのみ無理に結びつけるようなことはしない。例えば意志、願望等を表わす хотеть, просить, стараться 等の動詞は普通全体的行為の完了を目指すものであるから、（一回の行為に関する限りは）完了体動詞

を伴うことが圧倒的に多いが、行為自体あるいは行為者や行為の状況に重点がおかれれば不完了体を伴い（例えば—Когда тройка была заложена, Сергей Иванович с улыбкой обратился к Никите:—Сами желаете седлать?—ここでは意味のウェイトは сами すなわち行為者にある）。また、（その不完了体が意図を表わし得る動詞ならば）不完了体を伴うことによって、行為の達成や結果ではなく、その意図が表現され得る（例えば—Незласов, я слышал: вам как можно скорее—в тайгу, с бронепоездом?—Глупости! Я хочу ловить Пеклеванова. Никто, кроме меня, его не поймает, клянусь.—）（p. 234）。

確かな理論を武器として体の用法を体系的に述べたものとしては、本書の他に О. П. Рассудова の《Употребление видов глагола в русском языке》がある。理論的背景はほぼ同じであり、Рассудова も Forsyth 同様に先ず完了体をポジティブに定義し（「行為の全体的把握」—стр. 5）、不完了体を、完了体の意味を表現しないまましておくものと解する。この一般的意味は具体的には特殊の意味として現れ（完了体は、具体的事実の伝達、総括的伝達、例示的伝達。不完了体は、経過記述的伝達、事実確認的伝達、反復記述的伝達—стр. 8）、それらのどの特殊の意味が現れるかは、行為に対する話し手の視点、動詞の語彙の意味、文法形式、話し手の伝達課題等の要因によって決定される（стр. 8—12）。⁶⁾ このように体の一般的意味は様々の発話の要因を受けて個々の具体的な用法となって現れるとされ、Forsyth の基本的な立場とほぼ同一と考えられるが、重点のおき方の相違は無論あって、例えば Forsyth が執拗に強調する不完了体の名指し機能は Рассудова では幾分低く評価され、他の特殊の意味と同列におかかれる。またその説明に際して行為の過程の概念を持ち込むことが多い（стр. 37—44）。Forsyth はこのような場合に過程の概念を援用することを徹底的に避け、あくまで denotative function で押し通す（例えば p. 87 や p. 92）。これは名指しを不完了体の唯一のポジティブな意味と考え、他の過程、反復等の意味を不完了体に内在的なものとしては認めない Forsyth の立場からは当然の帰結であると思われる。

Forsyth の特徴の一つは、強固な理論的立場を堅持しながらもなお体の実際に忠実であろうとする態度である。例えば Рассудова が不完了体単純動詞とそれに接頭辞を冠した完了体動詞の ペアーを体の ペアー（видовая пара）としては殆んど認めない（ただし семантическая пара—意味的ペアーは認める）のに対し、Forsyth は上述のペアーの多くを体のペアーとして認める。それ

は、一般に体の ペアー と見なされることの多い читать-прочитать 型の動詞のみならず、例えば、運動の動詞の定動詞とそれに接頭辞 по- のついた完了体動詞、さらに不定動詞とそれに接頭辞 за- のついた完了体動詞等をも体のペアー（全的な対応でない場合もあるが）として認めることにまで到る（p. 33—46）。このような考え方は一般的には疑問視され、また否定もされようが、体の実際という見地からは必ずしも不都合とは言えないし、また外国人学習者の体の理解に利するところが大きいと思われる。⁽⁷⁾

また体の用法を論じるときに無視されがちな副動詞、形動詞、運動の動詞の体への言及や、完了体未来を不完了体未来のみならず不完了体現在ともかわらせて論じるなど、体の実際の活用への配慮は随所に現れている。

用例として引用される文章がしばしば非常に長いものであることも指摘しておかなければならない。体の選択が文の syntactic-expressional balance に大きく左右される以上、コンテキストを無視しては体の用法の本格的解明は望めないのであるが、従来、とくに入門書においてはこの点が無視され、専ら短い引用で無理に説明しようとする傾向が強かったといえる。

体の用法の解明には、強固な理論とプラクティカルなアプローチの双方が要求されるのであるが、その意味で本書は今後の体研究に大きく貢献する秀れた研究書と言えるだろう。

注(1) 代表的なものとしては例えば、R. Jakobson: Zur Struktur des russischen Verbums(後述); Ю. С. Маслов: Вопросы глагольного вида. Вступительная статья. Москва, 1962; А. В. Исаченко: Грамматический строй русского языка в сопоставлении со словацким, т. II. Морфология. Братислава, 1960. など。

(2) 例えば А. Mazon: Emplois des aspects du verbe russe. Paris, 1914 (但し筆者は未見); А. А. Спигис: Образование и употребление видов глагола в русском языке. Москва, 1961 (及び同著者の《Парные и непарные глаголы в русском языке》Москва, 1969); О. П. Рассудова: Употребление видов глагола в русском языке. Москва, 1968 (邦訳として磯谷孝訳編「ロシア語動詞 体の用法」吾妻書房, 1975 がある); 井桁貞敏: 露語動詞の體, 三省堂, 1941.

(3) «Roman Jakobson. Selected Writings. II.» The Hague, 1971. 及び Forsyth による英訳 (p. 7) による。

(4) Trubetskoy-Jakobson の用語である «privative opposition» の訳。

(5) この定義は Исаченко の «СВ [Современный вид] представляет процесс

как целостное, сомкнутое событие.» (注(1)にあげたものの136ページ)に非常に近い。Forsyth は自分の定義が L. Razmusen と Маслов に基礎をおいていると言っているが (p. 7—8). 上の Исаченко の定義に言及しないのは片手落ちと思われる。

- (6) Рассудова も Forsyth 同様に 不完了体の 確認的機能 (констатирующая функция) を重視する (стр. 18, 87—88)。また, Forsyth の強調する logical weight も Рассудова によって指摘されている (стр. 11)。
- (7) 例えば, 日本語の「行く」のロシア語訳として идти, пойти のどちらを選ぶかが問題になる場合があるわけだが, 両者を単に異なる体の動詞とみなすよりも体のペアーとみなして様々の状況のもとでの用法を検討した方が, このような場合に有効と思われる。